

柵が一列、井戸が四基、土坑が一五基、溝が一五条である。このうち木簡が出土したのは、井戸四からである。井戸四は直径一・二五m、深さ一・三八mを測る円形の素掘井戸である。

井戸四から出土した遺物は木簡二点のほか、完形の土師器皿、木

鍾三点、漆器皿二点、斎串二点、曲物片、板材などであり、時期は一四世紀前半頃とみられる。

他の遺構から出土した遺物には、瓦器（甕・椀・三足釜）、滑石製石鍋、温石、東播系須恵器（捏ね鉢・椀）、土師器（羽釜・皿）、同安窯系青磁（皿）、白磁（椀）、黒色土器などがある。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「蘇民将来之子孫家門也」

152×34×5 032

(2) 「蘇民□ □

(120)×34×4 039

(2)は表面が腐蝕しており、赤外線テレビカメラ装置によつても全文は判読不能であった。

(中村 弘)



(1)



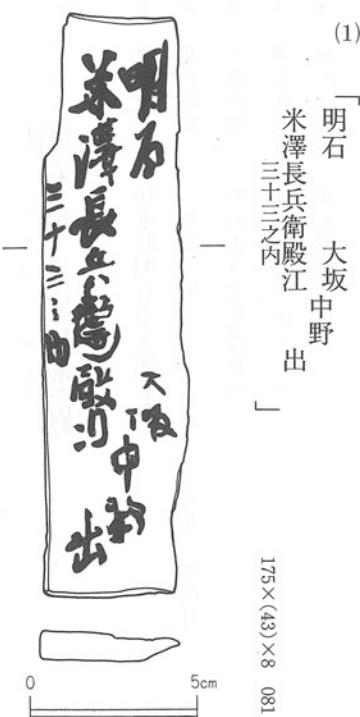
(明石・須磨)

阪神淡路大震災によつて
明石城跡の石垣も大きな被
害を受け、石垣補修工事が
ほぼ城内全域で行なわれる
こととなつた。本丸石垣も
同様で、櫓を曳屋工事によ

所在地	兵庫県明石市明石公園
調査期間	一九九六年(平8)八月~九月
発掘機関	兵庫県教育委員会
調査担当者	渡辺 昇・大西貴夫
遺跡の種類	城跡
遺跡の年代	江戸時代末~明治時代初め
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	

明石城は元和四年(一六一八)に小笠原忠政(忠真)によつて築城され、一八代二四九年間明石藩主の居城となつた城である。本丸の南西部に位置する坤櫓もその際に築かれたと伝えられている。

兵庫・明石城跡 坤櫓



8 木簡の釈文・内容

つて移動したのち、石垣工事をすることとなつた。櫓の基礎部分についても、元の位置に復原することにはなつてゐるが、石垣解体に伴つて削らざるを得ないことから、発掘調査を実施した。

坤櫓は五×六間の三層の櫓である。南北に長く東面に入口を設けている。築城時に伏見城の廃材を利用したと伝えられている。明治時代に解体修理を行なつており、その際に補強の石材や束石が入れられていた。当初は東西四石、南北五石の主柱通りのみ基礎石が計一四石配置されており、礎石の多くには墨書で記号が記されていた。古い時期の裏込めは角礎や人頭大の石材が使われている。明治期に置かれた石材を除去し、本来の面を確認する段階で木札（木簡）が出土した。陶磁器・将棋の駒（王将）・鉄釘が共伴している。

(2) 「王将」
32×27×9.5 061
米澤家は明石城周辺の大地主であり、米澤長衛（木簡では「長兵衛」）は米穀商を営み第五十六国立銀行を設立した名士である。
(渡辺 昇)